

平成二十一年度年史企画展

「学の実化」の時代——山岡順太郎・倭 父子展——をふりかえって

熊 博 毅

はじめに

創立一二〇周年を記念して平成十八年（二〇〇六）十月に開設された年史資料展示室では、オープン以来、「創立の時代に想いをはせて」（平成十八年度）、「簡文館ものがたり」（平成十九年度）、「正義を権力より護れ——児島惟謙歿後百年記念展——」（平成二十年度）といった企画展を開催してきた。

平成二十一年度（二〇〇九）は、関西大学中興の祖と呼ばれる山岡順太郎と、その長男・倭（文中、この二氏については敬称を略する）に焦点をあてた企画展「学の実化」の時代——山岡順太郎・倭 父子展——を実施し



企画展示室

た。開催期間は平成二十一年四月一日から平成二十二年三月末日まで。土曜、日曜、祝日および大学が定める休日は閉館したが、校友会のスプリングフェスティバルや教育後援会総会、オープンキャンパスなどの行事開催日には開館した。

今回の展示に関わる準備作業や展示の構成・内容などを振り返り、のちの記録として留めたい。

一 山岡順太郎と倭

山岡順太郎

展示のことをしるす前に、山岡順太郎と倭の略歴を紹介しておこう。

本学総理事兼第十一代学長となった山岡順太郎は、慶應二年（一八六六）九月十八日、金沢藩（現石川県）に生まれた。明治十二年（一八七九）、金沢医学校に入学するものの「志は医にあらず」としてまもなく退学し、陸軍士官を志して上京した。しかし、士官学校入学試験の二次試験を受験する数日前にけがをしたため、これを断



山岡 順太郎

念し、明治十八年（一八八五）十月に茨城県収税属となった。在任すること七年を経たが、ある事件をきっかけに退職。同郷の先輩である中橋徳五郎を頼って通信省に就職した。

通信省では主計課法規係長まで進んだが、明治三十一年（一八九八）九月、中橋とともに通信省を退職し、大阪商船株式会社に入社した。以後、十数年に亘って中橋社長を助け、大阪商船発展の基礎を築いた。

また、当時衰退していた大阪鉄工所（日立造船の前身）の社長となり、積極経営を推し進めて再建に成功、大阪財界にその名を轟かせた。ほかに日本電力の社長や宇治川電気、大阪曹達など、十社以上の会社役員を兼ねた。

こうした手腕が認められ、大正六年（一九一七）十二月から同十年（一九二一）まで土居通夫のあとをついで大阪商業会議所会頭を務めた。

関西大学とのかかわりは、このころに始まる。本学理事であった柿崎欽吾（当時、大阪商船顧問弁護士）の推薦により大正九年（一九二〇）九月二十五日、本学評議員となり、大正十一年（一九二二）五月二十日には総理事に選任され、翌十二年（一九二三）二月二十八日、第十一代学長を兼務した。本学が千里山に新しいキャンパスを設け、大学昇格の悲願を達成できたのは山岡の尽力によるところが大であり、本学中興の祖と呼ばれる所以もそこにある。

昭和三年（一九二八）十一月二十六日歿。ときに六十二歳。同二十九日、四天王寺で行われた葬儀には本学の理事教職員一同が葬儀委員となり、学生全員が参列したという。

山岡 倭

山岡 倭は順太郎・いち子夫妻の間にできた三男三女

の長男として、明治二十三年（一八九〇）四月二十四日に誕生した。順太郎の子ども六人は、それぞれ長男が倭、長女が櫻、二女は心、三女は鳥、二男が旭、三男が敷と命名されたが、これらを合わせると本居宣長が詠んだ「敷島の 大和心を 人間はば 旭に匂う 山桜花」となる。順太郎の気風的一端をうかがうことのできる逸話である。長じて倭は慶應義塾大学を卒業。大正四年（一九一五）十月十一日に鳥取県東伯郡倉吉町の資産家である桑田熊蔵の妹、千賀子と結婚し、三男一女をもうけた。倭は日本人造肥料会社や大阪鉄道（現近畿日本鉄道）の取締役、大阪製鎖所の専務取締役などのほか、極東硝子会社社長を務めた。



山岡 倭

関西大学と倭の関係を見ると、学生たちに物心両面で強力な支援を行ったことが大きな功績として挙げられる。

たとえば、『関西大学百年史 通史編 上』には、大正十五年（一九二六）八月に完成した、当時東洋一と称された大グラウンドの建設工事に倭が先頭に立って尽力したことがしるされているが、これも倭の功績の一つである。

また、大正末から昭和初期にかけては、野球部やサッカー部など運動各部が頻繁に海外遠征を行っているが、海外渡航が今ほど簡単ではなかった時代に、そうしたことが実現したのは、倭が資金面での援助を行ったからであろう。残念ながら、そのことを明確に示す資料は残っていないが、当時の関係者が口をそろえて語る倭の思い出話から、容易に想像することができる。

さらに倭は北陽商業学校（のち北陽高校）の創立に力をいたし、現在、創立者と位置づけられている。その間の事情は、鈴木清士関西大学北陽高校校長がしるした本書掲載論文「関西大学と北陽との縁について」に詳しい。

平成二十年（二〇〇八）四月、北陽高校は関西大学と合併し、関西大学北陽高校として新たなスタートをきった

が、これにより、倭と関西大学との縁が再び強く意識されることになった。

二 山岡康氏が語る順太郎と倭の思い出

遺族のご協力

今回の展示にあたっては、順太郎の孫であり、倭の長男である山岡康氏から資料提供をはじめ、全面的なご協力を得ることができた。

資料借用のお願いと、山岡順太郎・倭父子にまつわる思い出話を聞かせていただくため、わたしと年史編纂室の藤原有和が、大阪府藤井寺市にお住まいの山岡康氏宅を訪れたのは平成二十年（二〇〇八）十一月十九日のことであった。倭が建てたという瀟洒な洋館の二階で、わたしたちは三時間あまりに亘って順太郎と倭の思い出話を聞かせていただいた。

当然のことながら、順太郎や倭の人となりについては、これまで書物や写真などでしか知ることができず、特に倭については、大学にも資料がほとんど伝わっていないだけに、肉親が語る話はリアリティにあふれ、それまで

いだいていた順太郎や倭に対するイメージが大きく変わり、より身近な存在として感じる事ができた。三時間という時の流れが大変短く思えた晩秋の午後ひとときであった。倭と順太郎にまつわる記憶を康氏のことばとして以下にまとめておこう。

祖父・順太郎と父・倭の思い出

わたしは小さかったこともあり、祖父の思い出はあまり残っていないのですが、大人になって、ある会合で松下幸之助さんと向かい合わせに座ったことがありました。そのとき、松下さんから「わたしが今でも残念に思うのは、山岡順太郎さんに経営のお話を伺うことができなかったことです」と言われました。経営の神様と呼ばれる松下さんから、祖父のことをどのように言われたのは、今でも忘れられません。

近畿日本鉄道の母体の一つと言える大阪鉄道（大鉄）が、伊勢電気鉄道とまだ合併していなかったころ、父は大鉄の役員として藤井寺の春日丘住宅を作りました。新興住宅街だったので碁盤の目のように道が走り、それぞれ

れの通りには「何条」という呼び名がつけられました。この家も「八条通りの山岡」と言えは、すぐ分かってもらえたのですが、戦後、何条通りという呼び名は消えてしまいました。

わたしは父からスバルタ教育を受けました。父が数えで五十歳ころのことと記憶していますが、家の外で父とキャッチボールをしたとき、父は子ども相手に本気で速いボールを投げてきました。あまりに手が痛かったのですが、わたしはグローブにそつと手袋を入れたりしたのですが、父はそのことすら気がつかなかったと思います。家の前の道が行き止まりになっていましたので、そこにバックネットを置いていました。

子どものとき、わたしは野球好きの小学生たちが集まって作っていた少年野球チームに入っていました。小学二年生でキャッチャーをしていたのですが、対抗試合に出たら「あのキャッチャーは何年生か知っているか。二年生やで」と言っているのが聞こえました。五、六年生で編成されているチームの中で、下級生なのにレギュラーだったのは、父の指導のおかげです。

父はわたしには厳しかったですが、弟（順氏）はスパルタ教育を全く受けていません。弟からは父との思い出がある分、うらやましいと言われますが、わたしにしてみれば父は怖い存在でした。

しかし、父は何でも買ってくれ、物質的には充足されてきました。わたしの成長にあわせて自転車も毎年買ってくれましたし、洋服もすべて誂えでした。

わたしが通っていた天王寺師範（大阪教育大学）付属小学校では、黒い詰襟の制服と芯の入った帽子が定められていました。しかし、父はそのデザインが気に入らなかつたので、わたしの服だけ折り襟にしました。帽子もイギリスのイートン校の紺色の帽子を取り寄せたのです。この帽子の底は極端に小さく、頭頂部にはベレー帽についている小さな尻尾のような飾りが乗っていました。わたしはこの服と帽子を着用するのがいやで、特に帽子については、人とすれ違う時など脱いで通り過ぎていました。幸い帽子は一年間で被らなくてもよくなりましたが、服は六年間着用しました。

普通の親なら学校が定めた制服・制帽に従うのでしょ

うが、父はそうではなく、わが子のために良かれと思いつ、自分がこうだと決めたら、厳しいルールの中にあつても、その信念を実行に移し、現状を打ち破ろうとしたのです。

わたしは小学校の六年間、一日も休むことなく登校し、皆勤賞をもらいました。少しぐらい風邪をひいても学校へ行かされたからです。そうしたとき、父は朝一番でタクシーを呼び、わたしを近くの耳鼻咽喉科へ運ばせ、終わつたら待たせてあつたタクシーでわたしを学校へ送らせました。ただし、タクシーの運転手には正門の百メートル手前で停まって私を下ろすよう、厳しく指示していました。

父は厳格でしたが、わが子を愛していたのも間違いない事実です。子どもときはあまり気づきませんでした。が、今になってみると父の愛情を強く感じます。

強力な応援団・山岡 倭

父は関西大学野球部の発展に大変情熱を注ぎました。

野球道楽と言つてよいほどです。日本中の名選手が関西大学へ無試験で入れるようになっていました。のちに「ミ

スタータイガース」として有名になった藤村富美男選手（広島、呉港中学出身）も関大に入れようと、自らスカウトに出かけました。しかし、広島から帰ってくるなり、「ダメだった。阪神にやられた」と悔しがっていました。

関西大学に入学した野球の名選手には釣常雄投手（姫路中学出身）や黒沢一壘手（鳥取一中出身）、本田竹蔵投手（高松中学出身）などがいます。

大正末から昭和のはじめにかけて、慶応義塾は関西大学など相手にせず、交流試合もありませんでした。そのころ、慶応には人気絶頂のスター選手、宮武三郎投手（のち阪急初代主将）がいました。東京六大学と関西六大学とでは大きな格差があったのです。しかし、実際に試合をしたところ、関大が慶応に全勝しました。本田竹蔵選手はピッチャーで三番を務め、ホームランを打ちました。出島貞男選手はセンターで四番打者でした。このエピソードは野球部第一期黄金時代の伝説と言えるでしょう。わたしが今でも関西大学野球部の活躍を覚えているのは、毎週のように京阪沿線の野球場へ父に連れていかれたからです。

父は野球部だけでなく、漕艇部の部員たちも可愛がりました。クラブにボートを寄贈したのですが、そのボートはわたしの名前に因んで、やっちゃん号と命名されました。のちに叔父の岸田幸雄（元兵庫県知事）が山岡順太郎を偲ぶ会を開いたとき、関西大学の学長を務められた岩崎卯一先生がスピーチの中で紹介され、このことを知りました。

わたしは社会人の現役時代、ライオンズクラブに所属していましたが、そのときクラブのメンバーから「自分は関西大学の出身なのだが、お父さん（倭）に軽音楽部の楽器全部を寄付してもらい、大変お世話になった」とお礼を言われたことがあります。

また、家には関西大学の学生を書生として置いていました。私が六歳のころ、家にいたのは柔道部の古賀選手。それに山崎さんという棒高跳びの選手も書生をしていました。父は家の隣の空き地に棒高跳びの練習場をこしらえ、山崎さんに練習をさせました。関大陸上部を強くしたいという気持ちがあったのかもしれませんが。ロサンゼルスオリンピックで銅メダル（三段跳び）をとった陸上

の大島鎌吉選手もよく家に来ていました。

父が大阪鉄道の役員をしていたことは先に話したとおりますが、父は大鉄の役員として藤井寺球場を作ります。

そのとき二出川延明さんに協力を求めました。二出川さんは明治大学野球部でセンターを守り、卒業後、銀行勤めをしていましたが、野球選手だったのを見込んで父が引いたのだと思います。藤井寺球場ができ、父も亡くなったので、二出川さんは大鉄を去り、プロ野球の審判になりました。後年、「俺がルールブックだ」の名言で有名になりました。

藤井寺球場には相撲の土俵もありました。大正十二年（一九三三）十一月に第五代学生横綱となった相撲部の竹田繁七選手は卒業後、大鉄に入社しました。相撲も人気のあるスポーツでしたので、藤井寺球場の土俵では会社対抗の相撲大会も行われていました。

山岡家の墓所

今年、平成二十年（二〇〇八）は昭和三年（一九二八）十一月二十六日に亡くなった祖父・順太郎の五十回忌と

なります。山岡家の墓は金沢の野田山墓地（前田侯の墓地）にあります。菩提寺は高岸寺です。祖父は犀川沿いにある千日町の足軽長屋で育ちましたが、墓地には山岡家が足軽だった時代に作られた先祖代々の小さな墓と、祖父が建てた立派な墓が並んでいます。祖父の法名は大乗院達日順居士です。

先祖の関係でエピソードを紹介しますと、順太郎の父・弥五郎は号を美章というのですが、美章土地という不動産会社を経営していた山岡家は、阪和線ができるとき、駅を作る資金を寄付したようです。美章園という駅名は弥五郎の号、美章からきています。山岡順太郎にまつわる逸話として大阪商工会議所の会報にも紹介されました。

三 展示の内容

さて、具体的な展示の記録にもどうだろう。

年史資料展示室内の企画展示室には、大型の縦型展示ケース一基と写真パネル展示台が備えられている。それ以外に、壁面を利用して解説パネルを設置するのも例年の展示方法となっている。

壁面写真パネル

展示の順路としては、最初に「ごあいさつ」、さらに大型の展示パネルを壁面に設置し、山岡順太郎・倭父子が関西大学とかかわりをもった時代の特徴的なことから四つに分けて説明した。これによって展示のテーマを理解してもらおうように努めた。それぞれの解説はつぎのとおりである。

①解説 大学昇格と千里山学舎の建設

本学は明治三十八年以來、校名「私立関西大学」を使用していたが、専門学校令に基づく学校であったため、大正七年の大学令公布に伴い、昇格への体制作りを本格化させた。本学が昇格するためには、多額の資金が必要であり、そのため、柿崎欣吾理事は年来の親友である山岡順太郎の出馬をうながした。当時、山岡は、大阪商業会議所会頭、日本電力社長、大阪商船副社長、大阪鉄工所取締役会長などの要職を兼ねており、大阪財界の重鎮であった。

また、山岡自身も、教育の重要性を痛感し、社会



壁面解説パネル

事業や育英事業に深い関心を持っていた。柿崎の勧めに応じた山岡は、大正九年九月本学評議員となり、翌年九月、関西大学拡張委員会が組織されると会長に就任、昇格に必要な募金活動の先頭に立った。

関係者が苦勞を積み重ねた結果、寄付金も集まり、大正十一年四月には、大学予科校舎が竣工した。当時の新聞は、「海拔二百七十尺の高所——千里山に新築の関西大学 予科教室は本月中に竣功 松風床新しい校舎は汽車の轟音に悩まされる旧校舎に比べて雲泥の差」と報じている（『大阪毎日新聞』大正十一年四月二十八日）。

大正十一年六月五日、大学令により関西大学の設立は認可され、ついに悲願が成就した。

② 解説 「学の実化」講座と夏期語学講習会の開催

山岡は、「学の実化」とは、「深遠なる真理を平易に説き、学理を實際に調和せしめたいというにはかならない」と述べている。「学問の實際化」あるいは「学問の實踐化」のため、「学理と實際との調和」「實際的精神の涵養」「外国語学習の必要」などを力説

し、その実現のために「学の実化」講座をはじめとするさまざまな方策を講じた。

「学の実化」講座は、駐日フランス大使ポール・クローデルによる「フランス語について」（第一回、大正十一年五月二十七日）を皮切りとして、六年間に合計三十三回開催された。

また、「大学のエキステンション」「大学の社会化」の標語を移行に移して、「日曜日講座」を催し、ひろく一般市民に参加を呼びかけた。さらに、大正十二年夏からは、夏期語学講習会が開催された。この講習会は男女共学制をとっており、当時の人びとにフレッシュな感じを与え、好評を博した。

③ 解説 大運動場建設と第一回大学祭

山岡は、体育の奨励にも力を入れた。体育奨励の理由を山岡は、「団体的精神の訓練、学校全体としての剛健闊達なる氣風の助長、真剣味の發揮という点などから必要不可欠である」と述べている。

千里山の予科校舎の建築と並行して、テニスコート（二面）、角力士俵が建設された。引き続き、校

舎の東側窪地（現在の総合図書館、尚文館の場所）に、半円形スタンドを有する「東洋第一の運動場」を建設した。山岡はこれに私財を投じ、長男倭この事業の先頭に立って尽力した。

大正十五年十月二十三日、創立四十周年記念式と昇格記念式が挙行され、同時に第一回大学祭も開催された。翌日の大運動場開場式では山岡が式辞を述べ、倭から工事報告がなされた。次いで記念陸上大運動会が開催された。

さらに山岡順太郎・倭父子は、野球部をはじめとする運動各部などへの支援も惜しまなかった。

④解説 大学本館と図書館の建設

大運動場の竣工間近い大正十五年七月、運動場北側の台地の上（現在の「あすかの庭」南側）で大学本館の建築が始まった。昭和二年三月に工事は完了したが、この大学本館は、北浜にあった住友合資会社の社屋を解体して千里山に移したものである。この移築には住友の顧問弁護士であった喜多村桂一郎理事と山岡の尽力によるところが大きかった。

また山岡は、専任教授養成の目的で海外に留学生を派遣するとともに、図書の実用にも努めた。従来ほとんど洋書を持たなかった本学が、その一部を篤志家の寄贈によりながら、この時期、一挙に一万冊に達する洋書を蒐集し、昭和三年四月には図書館を竣工させた。こうしたこともあって、翌年二月には関係者の寄金を仰ぎ、山岡総理事の功績を記念する山岡文庫が設けられた。

こうした解説パネル以外に、壁面には「学の実化」の解説パネルと、作詞者である服部嘉香直筆の関西大学歌扁額も展示した。このうち、「学の実化」の解説パネルにはつぎのような説明を加えた。

①解説 「学の実化」と山岡順太郎

大正十一年（一九二二）四月、財団法人理事となつた順太郎は翌五月二十日、総理事に就任。すぐさま「学の実化」を提唱した。

「学の実化」という考え方は、「学理と実際との調和」「国際的精神の涵養」「外国語学習の必要」の三

点からなるが、その中心となったのは「学理と実際との調和」であった。

大正十一年（一九二二）七月十五日発行の『千里山学報』第二号にも掲載されているごとく、「大学は学者を養成する所ではあるが、学者になる人物はごく一部であり、大半は実社会に出て活動する人で占められている。国家・社会に有用の材たる全面的人物の養成に力を致すことこそ、真に時代が要求する教育を行うということではないだろうか」と順太郎



「学の実化」解説パネル

は説いた。

こうした考え方が出てくる背景には、本学が経済都市大阪に立地していたということも大きな理由の一つとして考えられるが、順太郎が提唱した「学の実化」は関西大学の進むべき方向を示唆するという点で、まさしく遠見であり、その精神は今も脈々と受け継がれている。

現在、関西大学で歌われている学歌は大正十一年（一九二二）の大学昇格直後に制定された。学歌の一節には「学の実化」という歌詞も盛り込まれており、今回の展示では新生の動きを象徴する事柄の一つとして、あわせて取り上げた。展示解説はつぎのとおりである。

① 解説 学歌の制定

悲願であった大学への昇格を果たしたことから、山岡順太郎総理事が「学の実化」を提唱したことにより、「学の実化」講座や夏期語学講習会、日曜自由講座など、斬新な事業が数多く展開されるようになった。そして、そうした新生の動きの一つとして学歌

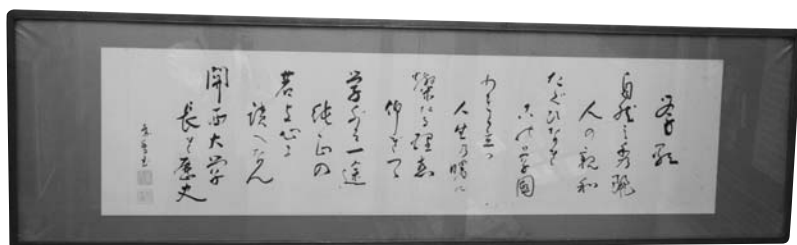
が制定された。

すでに関西大学には国文学者の池辺義象（作詞）と音楽家の弘田竜太郎（作曲）による校歌があったが、新しい時代にマッチした学歌が求められるようになってきたのである。そこで服部嘉香教授に作詞を、また服部の知人で当時、音楽界に新風を吹き込んでいた山田耕筰に作曲を依頼して学歌を制定することにした。

真理の討究と人格の陶冶を二本柱とし、学問の実



「学歌の制定」解説パネル



学歌篇額

際化や自由の訓練、自治の發揮といった内容も盛り込むというのが、作詞にあたって山岡総理事や宮島綱男専務理事ら、本学首脳陣がつけた注文だったといわれる。

展示ケース内展示品（すべて山岡康氏提供）

① 顔写真 山岡順太郎

② 顔写真 山岡 倭

③ 欧米視察の間、順太郎が家族に宛てて送った絵はがき

大正二年（一九一三）七月から十一月まで、五カ



展示ケース

月ほど順太郎は欧米視察に向向いている。現在と違って簡単には洋行ができなかった時代であったため、順太郎は旅先から数多くの絵はがきを家族に宛てて送っている。

④ 順太郎の繪端書（絵はがき）を収めた箱

順太郎からの絵はがきをまとめて収めた箱。順太郎は昭和三年（一九二八）十一月二十六日に没するが、その一年四ヵ月後の昭和五年（一九三〇）三月に倭が絵はがきをまとめ、箱に表書きをしるしたのであろう。

⑤ 順太郎の自筆色紙

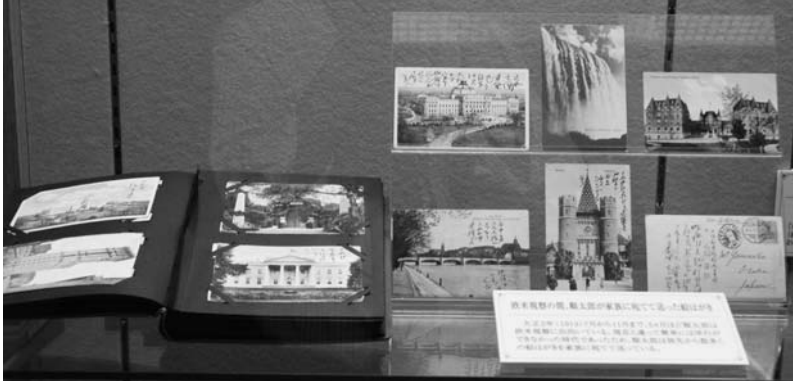
「吞舟之魚 不游支流

昭和貳年一月念日 孝堂」

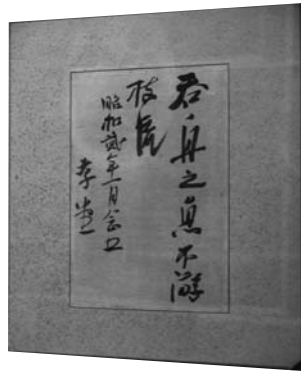
「舟を呑み込むような巨大な魚は、細い支流では遊ばない（泳がない）」ということから、大成する人物は本流を進むという意味であらう。

⑥ 順太郎の日記

⑦ 倭宛の順太郎書簡



順太郎が家族に宛てた絵はがき



順太郎の自筆色紙



順太郎の日記

写真パネル展示

写真パネル展示台には、四方向あわせて十八点の写真が展示できる。今回、この展示台では、順太郎の経歴を四つに区分し、「青年時代の山岡順太郎」「実業家としての山岡順太郎」「関西大学と山岡順太郎・倭父子」「山岡家の人びと」として関連する写真をまとめた。グループごとの写真と、そこに付け加えた解説はつぎのとおりである。

「青年時代の山岡順太郎」(四点)

①写真 少年時代の山岡順太郎(中央)と父(左)、叔父(右)

山岡順太郎は慶応二年(一八六六)九月十八日、金沢藩の下級武士山岡美章(弥五郎)、みつの長男として生まれた。明治維新の家禄奉還によって生家の生活は逼迫し、困窮の中で幼少時代を過ごした。

十四歳のとき、順太郎は初めて公開演説を体験した。演台へ上ると同時に「自分は二間間口の長屋に住んでいるものである……」と語りだしたため、聴衆に交じって聞いていた父弥五郎は狼狽し、あわて

て逃げ帰ったという。少年時代の順太郎は腕白で、戦争ごっこではいつも大将であった。

②写真 青年時代の山岡順太郎

明治十二年(一八七九)、順太郎は十三歳で金沢医学校に入学したが、「志は医に非ず」として間もなく退学し、同十六年(一八八三)、陸軍士官を志して上京した。東京では神田区美土代町の石崎小洲の門に入り、漢籍を学ぶとともに数学を修めた。この年、父弥五郎が逝去した。翌年、陸軍士官学校の入学試験を受け、第一次試験には及第したものの、庭内の



写真パネル展示

樹から落ちて足を挫いたため、第二次試験受験は断念した。

③写真 青年時代の山岡順太郎

明治十八年（一八八五）十月、順太郎は茨城県の収税吏となった。しかし、人情家である順太郎にとって、租税取立ての役人生活はおもしろくなかった。在任すること七年、たばこの不正を摘発したことで逆に恨みを買ひ、訴訟となったが、証拠不十分で順太郎は予審免訴を言い渡された。しかし、このことがきっかけで順太郎は収税吏の職を辞した。

④写真 通信省時代の山岡順太郎と中橋徳五郎

順太郎には同郷の先輩中橋徳五郎がいた。当時、中橋は新進気鋭の通信官吏で、大臣官房財務課長の要職にあった。明治二十五年（一八九二）、順太郎は中橋を頼って通信省に入った。中橋に見込まれた順太郎は財務課出納員となり、その後、出納掛から主計掛に転じ、省内予算の事務を受け持つて大いに手腕を発揮してゆく。

「実業家としての山岡順太郎」（五点）

①写真 執務室での山岡順太郎

明治三十一年（一八九八）六月、中橋徳五郎は通信省を辞任し、大阪商船会社の社長になると、順太郎を同社の文書課助役として招いた。順太郎にとっては人生の一大転機であったが、中橋を助けて大阪商船隆盛の基礎を築く。のちに大阪財界の重鎮となつていく順太郎の実業家としての才覚と手腕はこの時期に鍛えられ、成熟していった。

この写真は、順太郎を執務室で撮影したものであるが、背後に額装された船の写真が見えることから、大阪商船会社で撮られたものと思われる。

②写真 大阪商船内航部長時代の山岡順太郎

中橋徳五郎社長は明治四十年（一九〇七）、大阪商船の中に外国航路とは別に内航部を設置し、順太郎を部長に任命した。部長就任と同時に順太郎は別府航路を開設し、今日の別府温泉繁栄の基礎を築き上げた。順太郎が掲げた「世界の公園瀬戸内海」「天下の楽土別府温泉」といったキャッチフレーズは人び

との心を捉え、会社の増収にもつながった。

写真は、京阪神の新聞記者を別府に招き、別府町の当局者と一緒に撮影したもの（順太郎は中列右から四人目）。

③写真 海外視察（ロンドンにて）

大正二年（一九一三）七月、順太郎は大阪駅を出発し、敦賀でロシアの義勇艦隊ベンザ号に乗込み、ウラジオストクからシベリア鉄道経由で欧米視察の途に上った。同年十月、在米中の水谷揆一（のち関西大学教授）を案内者としてニューヨークを見学し、十一月、横浜へ帰ってきた。海外視察の途中、家族に宛てて送った絵はがきが、現在も多数、山岡家に残っている。

④写真 太刀山関と大阪鉄工所社長時代の山岡順太郎

その敏腕が社の内外に知られるようになった大正三年（一九一四）三月、順太郎は大阪鉄工所（現在の日立造船）に迎えられて社長となった。

順太郎が社長に就任したとき、同社は業績不振に喘いでいたが、三ヵ月後の同年六月二十八日、サラ

エゴに端を発した第一次世界大戦により日本の海運・造船業は未曾有の好景気に見舞われた。順太郎の積極策が奏功した大阪鉄工所は、わずか四年で進水トン数十倍増の成績を収めるに至った。

この写真は、明治末期から大正前期にかけ、諸手突きからの突っ張りや強烈な呼び戻しで無敵を誇った太刀山関を囲んで撮影したものである。太刀山の名は、板垣退助が「常陸山に迫れ」との願いを込め、郷里（富山県）の名峰である立山に因んで命名した。明治時代最後の横綱であり、「不知火型」と呼ばれる横綱土俵入りの型を完成させた（順太郎は前列右から二人目、太刀山関の隣り）。

⑤写真 宇奈月の工事現場を視察する日本電力社長・山岡順太郎

大正六年（一九一七）十二月、土居通夫のあとをうけ、順太郎は大阪商業会議所会頭に就任した。商船の山岡から大阪の山岡になったのである。

数多くの事業に関係した順太郎は「有電源而有産業」の持論により、大正八年（一九一九）、自ら日本

電力株式会社を創設し、社長となった。瀬戸、蟹寺、亀谷に水力発電所を造って十数万キロワットの電力を大阪へ送り、さらには水量豊富な黒部溪谷に出力五万四千キロワットの柳河原発電所を設け、東京への送電も行っている。また、火力発電にも着眼し、十四万キロワットの発電能力を持つ尼崎火力発電所を竣工させた。

写真は、トロツコ列車に乗り、宇奈月の工事現場を視察する順太郎ほか電力会社関係者である。

「関西大学と山岡順太郎・倭父子」（四点）

①写真 関西大学首脳陣

大正七年（一九一八）、文部省は近いうちに大学令を公布し、公私立大学にも帝国大学同等の資格を認めるといふ意思表明を行った。関西大学も昇格に備え、募金活動に着手した。このとき、大阪財界の重鎮であった順太郎は大正十年（一九二一）九月、柿崎欽吾理事の求めに応じて関西大学拡張後援会長となった。

その後、昇格への準備は着々と進み、大正十一年（一九二二）六月五日、本学は悲願であった大学昇格を果たした。ちなみに、この時の文部大臣は中橋徳五郎であった。昇格から半月ほど前の五月二十日、順太郎は関西大学総理事に就任する。以後、「学の実化」の理念のもと、新たな施策が次々と展開されていった。

写真は、大正十二年（一九二三）三月に撮影された関西大学の首脳陣。前列向かって左から菅沼豊次郎協議員、山岡順太郎総理事、下村宏評議員、桑田熊蔵顧問、柿崎欽吾専務理事、白川朋吉理事。後列左から田川七郎秘書、小泉幸治教授、岩崎卯一教授、宮島綱男専務理事、垂水善太郎理事、服部嘉香教授、木下孫一幹事。

②写真 第一回関法定期戦

千里山に大グラウンドが建設されるまで、本学陸上部の選手たちは大阪市立築港運動場で練習を重ねていた。ここは当時、国内最高の施設で、来阪したチームもほとんどここを利用した。そして、この運

動場とともに陸上競技の練習に励んだことが縁となり、大正十三年（一九二四）五月三十一日、法政大学との第一回対抗戦が開催された。昭和十四年（一九三九）に一時中断されるまで、関西大学の戦績は十四勝一敗で、圧倒的な強さを誇った。

写真は、第一回関法定期戦に出場した両大学の選手たち。中央の和服姿が順太郎。

③写真 クラブ活動のよき理解者であった山岡倭

順太郎の長男倭は慶応義塾の出身で、順太郎が社長を務める大阪鉄工所（現日立造船）に入社した。

その後、防犯用の網ガラスを日本で初めて作った極東硝子の社長となったが、残念ながら経営は芳しくなく、結局手放すことになる。なお、倭は関西大学北陽高等学校の前身である北陽商業学校の創立にも大きく貢献している。

私生活では、学生たちのクラブ活動に大きな理解を示した。自宅には常に運動部の学生を書生として住まわせていたし、軽音楽部に楽器すべてを寄付するなど、物心両面からの援助を惜しまなかった。

なかでも倭が特に好んだのは野球であった。のちに「ミスタータイガース」として勇名をはせる藤村富美男選手（広島・呉港中学出身）を関西大学に入れようと、自らスカウトに向いたが、願い叶わず、帰ってきて「阪神にやられた」と悔しがったエピソードも残っている。昭和五年（一九三〇）、関西で初めて野球部がアメリカに遠征して注目を集めたが、これにも倭の存在が大きく影響していた。

④写真 千里山大グラウンドの建設に尽力した山岡順太郎

順太郎は、かねてから教育における運動の重要性を力説しており、この考えは大運動場の建設となつて実を結んだ。予科校舎東側の窪地を造成し、四百メートルトラック、野球、サッカー、ラグビーの施設を併置して大正十五年（一九四〇）八月に竣工した約一万坪の大グラウンドは「東洋一」の名に恥じないものであった。

この事業については順太郎だけでなく、倭も率先して尽力した。グラウンド建設に果たした山岡家の協力は大きなものがあつたと伝えられている。

「山岡家の人びと」(五点)

①写真 孫のつどい

順太郎には三男三女があった。長男は倭、長女は桜、二女は心、三女は鳥、二男は旭、三男は敷である。名前の由来となったのは、本居宣長が詠んだ「敷島の 大和心を 人間はば 旭に匂う 山桜花」である。

この写真は、順太郎の孫たちが身長順に整列したところを撮影したもの。右端は倭の長男康であるが、幼少の康だけは母千賀子の膝に抱かれたという。

②写真 自宅の庭で長男倭とともに孫を抱く山岡順太郎

順太郎は子ども好きであった。まだ若いころ、夕方には決まって子どもを連れて銭湯へ行き、夜は子どもの手を引いて夜店を冷やかしに行った。倭が学校の運動会で賞品をもらって帰ってきたときなどは「子持ちの樂此邊にあり」と日記にしたため、大喜びしたという。

③写真 山岡順太郎といち子夫人

順太郎がいち子夫人と結婚したのは茨城県の収税

吏時代であった。順太郎の社会的つきあいが広がるにつれて家計の出費がかさみ、内情は必ずしも楽ではなかったが、順太郎が内顧の憂を感じることなく仕事に専念できたのは、いち子夫人の内助の功によるところが大であった。

④写真 天王寺の自宅に集まった山岡順太郎の一族

順太郎の自宅は住吉区天王寺町常盤通にあり、敷地は一万坪あったという。折々に集まった一族を撮影した記念写真が今も山岡家には残されている。

⑤写真 山岡倭一家

順太郎の長男倭には千賀子夫人との間に三男一女の子があった。この写真は、藤井寺にある倭の自宅玄関で撮影されたもの。

四 企画展を開催して

年史資料展示室では、展示室が開設された平成十八年(二〇〇六)の翌年四月から、新入生の導入教育の一環として、簡文館にある年史資料展示室ならびに博物館の見学を、全学の教育職員に対して呼びかけている。案内の

効果もあつて、毎年四月から五月にかけては、学生や教員あわせて二千人ほどが簡文館を訪れてくれている。そうした数も含めて平成二十一年度の来館者数は、平成二十二年二月二十八日現在で四二四一人となっている。

学生たちが見学に訪れたときには、できるだけ展示解説を行うよう心がけているが、今年は山岡順太郎・倭父子の企画展を開催していることから、大学昇格や千里山キャンパスの歴史を説明するのに、これらの展示が役立つている。

今回、資料提供で多大なご協力をいただいた山岡康氏は、ご自身の子息や親戚だけでなく、小学校時代の同級生もこの展示室に案内された。さらに倭の三男で、康氏の末弟である順氏も別の日に年史資料展示室を訪ねてくれた。いずれも今回の展示を好意的に受けとめてくださった。この展示をきっかけに、山岡家と関西大学との結びつきがさらに深まったのは、大変喜ばしいことである。

現在、康氏が所蔵している順太郎遺愛の品の中には、その人となりやさらに深く考察することが可能な資料的

価値の高いものも含まれている。そうしたものについては、今後とも山岡家の協力を得ながら整理や調査を進めることができたらと考えている。

(くま ひろき 学術情報事務局次長)